四年寮歌

(大正十

淋しく強く生きぬ可く不香の花の小夜嵐 れ i の袖に散る

手稲の峯に響くかな

熱腸しぼる杜鵑 送る梅花の芳せに

散るも惜しまぬ山桜。
誘ふ春風恨みては

月の面ゆく鳥の影の影のものものものものものものものものものものである。 草木悲歌を奏ひつつ 故山の空に微み行く きのふぞ移る秋風に

赴^ゅく 緑水我を弔はんりょくすいわれ とむら 青山我が有に帰せいざんわれいう 駄鞭荒野に打ふだべんくわうや や皇土の城の のをと りて

> 仰ぐみ空にまたたける 夢中原にさまよひて 事が そら はに誓ひし丈夫の 国に誓ひし丈夫の Ŧi.

北極星のかげ清し

三溝清美君 作曲

Ш

徳次郎 君

作歌